

# 漆

うるし

神主・奈良県立大学客員教授

岡本彰夫

AKIO OKAMOTO



おかもと・あきお  
1954(昭和29)年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司(2015年退職)。奈良県立大学客員教授、宇賀志屋文庫館長。著書に『日本人よ、かくあれ』(ウェッジ)など多数

奈良漆器の存在を知る人は、まことに少ない。しかし北村昭斎氏は、螺鈿技法で人間国宝の指定を受けておられるし、唐招提寺や薬師寺、近年再建された興福寺の須弥壇は、全て奈良の漆工の手によって塗り上げられている。奈良漆器は、神仏に捧げる高度な技術を伝承して、今に至っているのである。

とりわけ奈良に漆芸が根付き、螺鈿がお家芸である訳は、春日大社の造替制度が大きく影響している。

二十年に一度行われる、社殿の改修は建物のみに非ず、全ての調度品をも一新して来たのである。殊に昭和五年には内務省の監督下、平安朝以来の神宝も当時の最高技術で模写新調されたが、以後の困難により新調が叶わず、修繕を重ねて来た。しかし平成七年の造替以降、古式通り再び新調する事とした。つまり技術の伝承が可能となったのである。春日の神具は螺鈿が多く、毎月十日毎に行われる

「旬祭」に用いる八足案は一台に付、夜光貝を九二四点嵌入するという逸品で、他にも「手力盆」や「日ノ丸盆」にも螺鈿が施され、平脱技法に用いる、金・銀の薄板も、奈良では「金貝」と呼ばれている事を見ても、いかに螺鈿を中心と考えていたかがわかる。

さて次に肝心の漆のことである。承平年間(931~938)に成立した意義分類体の辞書『和名類聚抄』によると大和国宇陀郡には「漆部（倭）」の郷名が見えるし、平安末期の国語辞典とされる『伊呂波字類抄』の漆の項には『本朝事始』を引いて「倭 武皇子 宇陀阿貴山に游獵の時 手を以て折木の枝を牽くに 其の木汁 皇子の手を黒く美しく染む ここに皇子舎人床石足尼を召して曰く 此の木汁を塗りて 之を献ずべし 床石塗りて之を献ず 皇子大いに悦びて 其の木汁を取りて 翫好之物を塗る 床石足尼を以て漆部官に任ず」とある。かつて漆部司は大蔵省の管轄下の

役所であった。この漆部が大和国宇陀郡のどこに所在したかは、江戸時代になって徳川吉宗の命による『日本輿地通誌』編纂の調査に依る並河誠所らの実地調査で、「長野已下八村漆部郷 今呼 曾爾谷」とした。つまり現在の曾爾村を以て古代の漆部郷と考証した。重ねて本居宣長は、その著『古事記伝』において「蘇迹は大和、国宇陀、郡の東の極の山中にて、今、世八村（長野村、小長尾村、今井村、高野村、伊賀見村、太田路村、原井村）ありて、曾爾谷と云。古への漆部、郷なりとぞ」と、この説を踏襲した。

かつて曾爾村には多くの漆樹が自生していたが、水に腐りにくく、樹内に穴がある漆樹が、アコヤ貝の養殖網の浮として重宝されることから、伊勢志摩の真珠業者の需要に依って多くが買却された。そこで現在村興しの一環として、村内に残る樹を増殖させ、漆掻きの技術も習得し、数少ない日本産漆の生産に取り組みつつある。なんとか成功してもらいたいものである。



八足案  
昭和五年 堀部恒哉作



手力盆  
北村久斎作（中村雅真考証）



日の丸盆（大丸盆）  
樽井禧醉作

